

説文小篆字形差確認のためのツール試作と復古編の上正下譌の調査

鈴木 俊哉（広島大学 総合科学部）

概要： ISO/IEC 10646 に CJK 統合漢字とは別の文字体系として『説文解字』小篆を追加するための作業(投票案に組み込むための原案作成)が議論されている。その小篆グリフのデザインについて散発的に変更が加えられている。その中にはデザイン統一性を図る(底本からは離れる)変更と、底本に近づける変更が混在しており、一貫性が無い。しかしながら、小篆のデザイン統一性をどのように評価すべきなのか、検査すべき図形部品やその違いの大小に関する規準が無いため、検査作業量の見積もりが困難である。そこで、北宋の張有による『復古編』が含む、字様書附録の一つ「上正下譌」の正誤規準を用いることを考え、これを検査するために小篆字形を図形部品によって検索するツールを試作した。

キーワード： 説文解字、小篆、標準化、字形

Prototyping a tool to check the design consistency of the Shuowen Seal glyphs and the testing with the criteria in the Fugubian's "Shanzheng Xiae".

suzuki toshiya (Faculty of Integrated Arts and Science, Hiroshima University)

Abstract: The Small Seal character in Shuowen Jiezi (SW) has been discussed to append to ISO/IEC 10646, as a separated writing system rather than CJK Unified Ideograph. In the font development, some changes are for the glyph design consistency against the glyphs in the source material, and others are the reversions of the correction given in the modern reprint of SW. There is a concern that the resulted font would be another new glyph collection that differs from the source material but still include the inconsistency. To evaluate the glyph design consistency, a JavaScript based tool is prototyped to collect the Seal glyphs by their components.

Keywords: Shuowen Jiezi, Small Seal. Standardization, Glyph Variant

1. 背景

既報[1][2][3]のように ISO/IEC 10646 に CJK 統合漢字とは別の文字体系として『説文解字』¹小篆を追加するための作業(投票案に組み込むための原案作成)が開始された。符号表の初版は藤花樹本をベースにした小篆フォントにより印刷される見込みである。2017年の作業開始当初、中国書店より出版された藤花樹本の影印本[4]を用いていたが、これは藤花樹本原本(初印本)ではなく、民国期に商務印書館が出版した石印本の影印である²。この石印本は加筆されており、その小篆字形も初印本とは異なる箇所がある。2019年になってこのことが認識され、原本に近づけるための変更が開始されたが、並行して小篆字形の統一性を持たせようとする変更も加わっている。

¹ 本稿では煩雑を避けるため、文献名・編名は初出のみ『』や「」で囲む。

² 中国書店影印本(影印本の初印は1989年)は当初は序文や識語が無く、底本が明らかでなかった。2007年以降の版には中国書店の序文が付され、商務印書館の石印本を底本とすることが明示された。

1.1. 藤花樹本と現存宋刊本の関係

藤花樹本とは、いわゆる宋刊小字大徐本説文の清代の翻刻本の一つで、額勒布が鮑漱芳所蔵の宋刊小字大徐本を翻刻したとするものである。海源閣旧蔵の南宋刊元修小字本(海源閣本)に額勒布の印記があることから、これを底本としたものと考えられている[5]³。また、藤花樹本の直後に出版された孫星衍の平津館本の底本も現在では海源閣本と考えられている[8]⁴。

清・乾隆年間に広く用いられた汲古閣本説文解字は、宋刊大徐本を小徐本などによって改めていることが段玉裁の『汲古閣説文訂』で指摘され、これを受けて嘉慶年間以降に宋刊小字本が翻刻された。従って、これらの翻刻本は底本の忠実な

³ 王貴元氏は、海源閣本と藤花樹本の間に違いが少なくないこと、また、鮑漱芳の印記が無いことから、海源閣本は藤花樹本の底本ではないと考えた[6]。然しながら、その違いの多くは汲古閣通行本、また段玉裁の汲古閣説文訂によって改められているとすれば説明可能である。

⁴ 平津館本は底本を明らかにしないため、陸心源旧蔵本を妄改したという説が存在した[7]。董婧宸氏はこれが海源閣本に基づくことを実証的に示した[8]。

石印本が加えた文字学的な変更を取り消す方向の変更であり、呂、卓に対するものとは逆の主旨となる。

呂、卓、訊の3例に限れば、字形の統一性のために文字学的な正誤を度外視して、より多数を占める字形に合わせたという説明も可能である。しかし、訃(図2, 項番38)に関しては、刀と刃は説文でも別字であるし、六書が「从言刃聲」で反切が「而振切」であることから、小篆を「𠂔言刀」¹⁰に作るのはこの項だけの誤りと考えられる。これを書誌学的な情報の保存のために藤花樹本原本に従うべきと判断するのであれば¹¹、字形の統一性や文字学的な正誤に基づくような変更は加えるべきではないことになる。

またさらに、説(図2, 項番39)も同様の問題を抱える。「兒」単体字の上段は「白」の小篆のように作る¹²が、南宋刊元修本の「兒」を含む小篆は内部の左右の画が接触して「𠂔𠂔𠂔八人」, 「𠂔」, 「𠂔𠂔𠂔𠂔」などのように訛る場合があり¹³、藤花樹本原本はこの訛りを引き継いだものと思われる。石印本の字形も単体字の「兒」と完全に整合はしていないが、汲古閣本によって改めた結果「𠂔𠂔𠂔𠂔」の形になったと思われる¹⁴。以上のように、藤花樹本原本に従うことと、文字学的な正誤やデザインの統一性の両立は困難である。

加えて、誣(図2, 項番40), 誣(図2, 項番41)¹⁵も藤花樹本原本は海源閣本の字形に従うが、これ

に関しては、藤花樹本はこれをU字型に曲げた伝統的な小篆字形を用いる。従って、石印本は全ての小篆字形を無批判に段注本に合わせたわけではない。

¹⁰ この「𠂔言刀」の字形を持つ現代漢字はCJK統合漢字拡張Gで標準化されたが、その典拠は慧琳音義(T2128_54,0764a06)に見えるもので訃の異体字と推測され、説文とは関係が無い。

¹¹ 南宋刊元修本である海源閣本・陸心源旧蔵本とも「𠂔言刀」に作るが、南宋刊五音韻譜では訃である。これは李燾が補正した可能性と、李燾が拠った大徐本では誤らなかった可能性がある。このような議論をする基盤データとして、「𠂔言刀」の字形の小篆を指示したい、また、藤花樹本のデータベース化に際しては「𠂔言刀」を用いたい、という立場はありうるだろう。

¹² ただし、説文においては、この図形部品は白とは無関係で、「象小兒頭凶未合」と説明される、凶(「頭會腦蓋也象形」と説明される)から派生した図形部品である。説文は凶を単体字として含むが、凶は単体字としては含まない。

¹³ 海源閣本では𠂔、𠂔において「𠂔」に訛り、説、𠂔において「𠂔𠂔𠂔八人」に訛り、𠂔、𠂔において「𠂔𠂔𠂔𠂔」に訛る。

¹⁴ 段注本は「白」の小篆と同様の字形となるよう修正している。

¹⁵ 説文では掘・掘が2つの異なる小篆で別々に掲出されているが、誣・誣の区別は無い。

らが含む図形部品「出」の字形は、「出」単体字とは異なる[15]。その一方、石印本の字形は「出」単体字の字形と整合している。段注本は図形部品「出」を全て単体字の字形に改めており、石印本はこれに従ったものと思われる¹⁶。

2.3. これまでの字形修正の問題点

以上に見るように、標準化原案作成の過程で方向性が相反する改変が散発的に加わっている。規格票の例示字形に対して文字学的正しさ・デザイン一貫性を求める姿勢は自然なものだが、

- 入手可能な資料のうち、古いものほど善い筈
 - 善い資料は字形のデザインが一貫している筈
 - 善い資料は文字学的な誤りが少ない筈
- という素朴な仮定を合成した結果、デザインの統一性が無く、宋本にも従わない、新たな字形集合を創り出す惧れがある。

文字学的な議論は一文字ずつ議論しなければならないとしても、デザインの一貫性を確認するための整理手法に関しては情報技術的な補助の余地があるだろう。しかし、説文小篆は図形部品にしばしば象形性が求められ、単なる部品としての抽象化・共用化が進んでいない。そのため、どのような字形差を問題とするかの判定の共通化も難しく、説文学の中でも先行研究の字形差判定規準を踏まえて別の資料を調査する手法よりも、研究者ごと・資料ごと・論文ごとに判定規準を検討するという手法が多いのが現状である[16]。

3. 説文解字と復古編

説文は小篆を用いて正しい字形と正しい解釈を示すための字書なので、正しい字形のみ示す。説解の中で俗字を示す場合もあるが、それらは楷書で示される場合が多く、小篆の字形にどの程度の揺れを許すのか、説文だけからは読み取り難い。藤花樹本を元にしたフォントの品質確認が困難な理由の一つもこのような背景があるだろう。

隋唐代には、科挙をはじめとした行政における楷書字体を整理するため、『干祿字書』をはじめとするさまざまな字様書が発生した¹⁷。これらの字様書は多用される漢字について正・通・俗の字体あるいは字形を示すことを目的としたもので、それまでの字書・韻書に比べると収める文字数はずっと少なく、さらに、六書や音義を全く示さない項目も多い。これは図形部品の共用を既に前提

¹⁶ ただし、「崇」を含む文字に関しては、段注本は「出」単体字の字形に改めるのに対し、石印本は改めず、藤花樹本原本に従うようである。

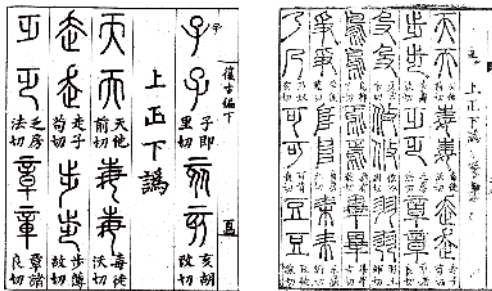
¹⁷ 干祿字書は字様書として最も著名なものだが、西原一幸氏の一連の研究によれば[11]、干祿字書の原型と推定される『顔氏字様』(唐貞観年間成立、逸書)以前にも『正名要録』などが成立しており、字様書の発生は隋代まで遡れる。

とした字書であり¹⁸、字形の正・通・俗の分類が主目的であることによるだろう。

3.1. 復古編の字様書的附録

大徐本以降の小篆の字様書と言えるものに、北宋の張有による『復古編』の附録がある[13]。復古編の本編は1240字の小篆を韻書排列で並べたもので、本編は字様書ではないが、附録の中に字様書として機能する部分を持つ。

- 形聲相類(102組 204字)
字体・字音が似ているが別字であるもの
 - 形相類(239組 508字)
字体が似ているが別字であるもの
 - 筆迹小異(78組 156字形)
字形に若干の違いがあるが同一字であるもの
 - 上正下譌(78組 156字形)
字形が似ているが一方が誤りとなるもの
- 筆迹小異が正・通を列挙したもの、上正下譌が正・俗を列挙したものと見ることもできる¹⁹。



影宋本の上正下譌 元刊本の上正下譌

図 3: 復古編の附録「上正下譌」

注記は小篆を指示する楷書と反切のみである。

復古編は刊本としては元末・至正年間の好古齋本までしか遡れないが、南宋初・紹興年間の王佐才刊本から写された影宋本が伝わる²⁰。この2つは序文に出入りがあり、また収字数も1字異なることから、別々の系統と考えられているが、筆迹小異と上正下譌に関しては収字数も同じで、示されている字形も多くは同一である。

¹⁸ たとえば、冒頭の聡(通)・聰(通)・總(正)に対して「諸從念者竝同他皆放此」としている。

¹⁹ ただし、上正下譌は「用いるべきでない字形」を対比によって示したものであるのに対し、隋唐代の字様書における「俗」は避けるべき「俗字」を指すものではないという指摘がある[11][12]。

²⁰ 広く通行しているのは四部叢刊三編所収の黄丕烈旧蔵影宋本である(本編が1239字である点が元刊本と異なる)。これは明末清初の蔵書家である錢求赤所蔵本から写されたことが末尾に書かれている。この他、王佐才刊本に由来するものとして明・黎民表刊本も存在する。これは影印出版が無く本稿では未調査であるが、黎民表刊本から写したとされる四庫全書本、および現存する黎民表本に識語を書いている明末馮舒写本と比較すると、黄丕烈旧蔵本のほうが訛りは少ない[18]。

3.2. 上正下譌を用いた字形差確認

上正下譌が正しいとする小篆はしばしば現行の大徐本とは異なる[14]。王珏氏は復古編における「走」の字形は説文の六書を用いて改めたものと指摘した[17]。「走」の説文小篆は、上段の図形部品について、六書では「夭」と説明しているが、大徐本の小篆字形での当該部分は「夭」単体字の字形とは異なる。復古編はこれを「夭」単体字の字形に揃えたものを正しい字形とし、通行の大徐本の字形を誤りとしたものと考えられる²¹。その後、王珏氏は上正下譌の全78組も調査したが[18]、主に他の出土文字資料に類似字形が見えるかという観点であり、説文での出現状況の定量的調査は無い。

そこで、同一の図形部品を持つ小篆字形の一覧を確認できるツールを試作し、上正下譌の全項目に対して説文および復古編での字形差の現れ方を調査することを考える。予備調査として、筆迹小異・上正下譌で言及されている字形差のいくつかを海源閣本と南宋刊説文解字五音韻譜でどのように現れるかを調査すると、これらの附録で指摘されているような字形差が両本で実際に生じており、さらに同じ小篆で同様に揺れる場合があることから、その字形差は説文の翻刻の際に維持されるレベルのものであることが判った[15]。従って、復古編の字様書的附録は説文小篆の字形統一性確認の指標としても有用と期待できる。

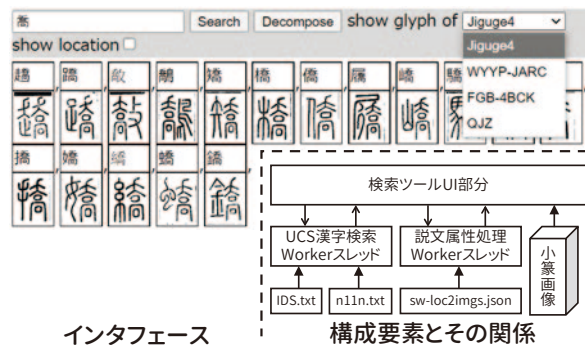


図 4: 試作したツールのインターフェースと構成要素

4. 調査ツールの試作

調査のためのツールは、UCS 漢字で図形部品群を指定し、小篆画像群を絞り込んで表示するという単純なものである(図 4)。バックエンド不要となるようブラウザ内部の JavaScript で動作するよう設計した。画像をオープンアクセス可能なも

²¹ 小徐本における「走」は復古編が正しいとする字形だが、王珏氏の調査[18]では唐代にこの字形が一般的であった形跡は無い。

ので差し替えたものを `gitlab` で公開している²²。各構成要素を以下に整理する。

4.1. UCS 漢字検索

まず、図形部品群から UCS 漢字を絞り込む部分については、ISO/IEC JTC1/SC2/WG2/IRG が用いている IDS データの TSV ファイル(IDS.txt)を用いる。これは CJK 統合漢字拡張 B までは CHISE で作成された IDS データに基づくが、拡張 C 以降は IRG に提案者が提出したものにに基づく。この TSV ファイルを XMLHttpRequest で読み込み、UCS 漢字から IDS を引く辞書オブジェクトを作る。これを再帰的に引くことで、指定した図形部品を UCS 漢字が含むかどうかを調べることができる。この再帰検索の過程で正規化可能な部品が見つかった場合には当該部品を正規化した上で検索を続ける²³。正規化部品は `n11n.txt` に TSV 形式で別に列挙しておく。

機能的には「零時字引」とほぼ同じである(HDIC での活用例[19]を参照されたい)。IRG が用いている TSV ファイルは、1つの UCS 漢字に対して複数の IDS を持つ場合があるが、「零時字引」は1つの文字に対し1つの IDS という設計のため、事前に正規化している。本稿のツールでは前処理不要とするため、複数の IDS を持てるデータ構造とした。検索時間は「零時字引」より非常に長くなるので、処理を Worker スレッドに分離した。

4.2. 説文属性処理

前節で絞り込んだ UCS 漢字から、さらに説文小篆に対応づけるものを絞り込む。段注本の XML から小篆と UCS 漢字の対応、SW.ttf²⁴グリフ-UCS 漢字対応表[20]を元に基礎となる UCS 漢字-説文小篆対応表を作成し、小學堂小篆で用いられている現代漢字なども追加した。

説文小篆での別字が UCS 漢字では区別できない場合もあるので²⁵、実際の関係は図 5-(1)のようになる。ここでの説文小篆 a, b などは大徐本掲出位置と説解に基づいて同定した単位である。本稿に用いるツールは UCS 漢字から小篆を検索するツールであることを考えて、これを図 5-(2)のような構造の JSON 形式データで表現しておく。内部では図 5-(3)のように展開する。

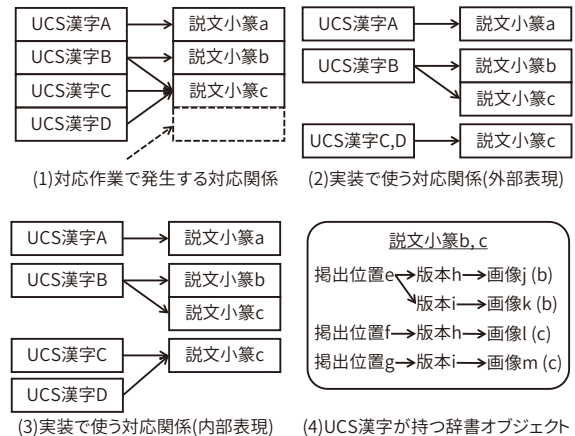


図 5: UCS 漢字と説文小篆の対応関係と、小篆が持つ属性情報

当初、UCS 符号位置→バージョン→バージョン内重出通番²⁶の絞り込みによって画像と出現位置(巻番号・葉番号・頁左右・頁内グリフ通番)を得る構造としていた²⁷。しかし、宋刊小字本とその翻刻本を追加する過程²⁸で、以下の難点が明らかとなった。

- 既存の小篆に対して、これを指示する UCS 漢字を追補する際、重複するオブジェクトが大きい(たとえば龔で指示している小篆を龔でも指示するための追補など)。
- ほぼ同一の体裁の翻刻本を追加する場合(たとえば、汲古閣通行本に対して汲古閣未改本を追加する場合など)、重複するオブジェクトが多い。

重複するオブジェクトが大きくなると追加や可変の際の差分も大きくなり、既存の VCS では変

²² グリフ画像を京大人文研所蔵の汲古閣未改本・祁寯藻本、国立公文書館所蔵の明刊五音韻譜などから切り出したもので差し替えたツールが <http://gl.githack.com/mpsuzuki/parseIDS.html/raw/fgb-jinmoncom-2021/>でアクセスできる。ただし、githack は.json 拡張子を持つファイルに対する XHR は正しく転送処理できるが、.txt や.tsv 拡張子では転送処理できない問題があり、これらも.json 拡張子で配置している。

²³ たとえば、食、食を食に、糸を糸に、高を高に、眞を眞に、長を長に、吳、吳を呉に変換する。IDS データそのものを正規化することはない。

²⁴ このフォントは華東師範大学で作成されたもので、多くは汲古閣通行本のスキャン画像に基づいていると思われる。ただし、汲古閣説文訂によって通行本の問題点が指摘されている箇所については初印本とも通行本とも異なる場合がある(たとえば巻 14 下末尾の布)。

²⁵ これは日本の常用漢字体で縮約される問題ではない。例えば白須裕之氏の議論を参照されたい[22]。

²⁶ 説文の中で字形、義注、六書、反切が同じ文字が 2 回掲出される場合がある。口部と又部の「右」など。

²⁷ CHISE にグリフ画像を提出した際の属性データは http://gyvern.ipc.hiroshima-u.ac.jp/~mpsuzuki/ShuoWen/ucs-sw_20180927-1043.json で公開している。

²⁸ 当初は陸心源旧蔵本、汲古閣本、段注本、祁寯藻本のように掲出位置に殆ど共通点が無いものから開始したが、陸心源旧蔵本、海源閣本、平津館本(嘉慶初印本)、平津館本(光緒重刊本)、藤花樹本などを追加した結果、同じ掲出位置を示すデータが過半数となった。

更点が判りにくくなってしまふ。そこで、外部表現において UCS 漢字 1 文字ずつを鍵とせず、改行区切りリストを鍵とし、さらに掲出位置を複数の属性で表現せず、結合した文字列で表現することとし、図 6 のような構造とした。

```

988 "loc2imgs": {
989   "v01a.107r.g11": {
990     "Inasaki": "swjz00039_v01.1.102.1.g12",
991     "PJG": "371-0043-19_013_0032_0240x0256+1712+3472",
992     "HYG": "SWJZ-HYGa-010.1-v01.1.102.1_0011_0268x0316+2216+3908",
993     "THX": "ho_00025_0001_p0014_0032_rot0.00_0050x0105+1015+1344"
994   },
995   "v01a.107r.g03": {
996     "Jiguge5-Kyoto": "A020019_0021_0052x0084+0411+0569",
997     "Jiguge4": "A0240271_0021_0116x0158+0838+1306"
998   },
999   "v01.106i.g03": {
1000     "QJZ": "ShuoXu-QJZ_003.304",
1001     "XZ-QJZ-LateJB": "A0180019_v01.106a_0011_0136x0136+0796+0624",
1002     "XZ-SGT": "WikiSrc-ARCK-seq70.p014-v01.106r_0003_0280x0344+1346"
1003   },
1004   "v01.106i.m00": {
1005     "v01.106i.m00": {

```

図 6: 各本の掲出位置と画像の関係の外部表現

UCS 漢字の改行区切りリストを鍵とし、値として loc2imgs 辞書を持つ。loc2imgs 辞書は掲出位置の文字列を鍵として、同一の掲出位置を持つバージョンの版本名・画像ファイル名の辞書を値とする。

この JSON ファイルの読み込みおよび内部表現への展開、またそれを用いたソート処理も Worker スレッドに分離した。このスレッドは処理すべき UCS 漢字群とバージョンを受信すると、属性情報の辞書オブジェクトを指定されたバージョンで排列した JSON 表現で返す。説文小篆に対応しない UCS 漢字は末端に集められる。

4.3. 再検索・再排列を伴わない画像底本切替え

復古編と説文のように収字数が大きく異なる場合、再排列が生じるとユーザが注視すべき画像表示位置が大きく変わり、字形の揺れも見え難くなる。また、版本毎の状況を見るためには 2 つのバージョンを頻りに切り替える操作が発生する。この遅延を短くするため、属性処理を呼び出す際にはバージョンを指定するが、結果には全てのバージョンの属性情報を返すようにした。検索結果として表示する IMG 要素は、全てのバージョンの画像 URL をカスタムデータ属性情報として持つ。図 5(4)において、最初に指定したバージョンが h であれば、表示する画像は j だが、それを表示している IMG 要素は data-src-h に画像 j、また data-src-i に画像 k の URL を格納し、バージョンを切り替えた場合は属性だけを書き換える。行指向の表示とした場合一覧性を向上させるため、画像を収める固定幅の table 要素を作り、CSS flexbox によって列挙する(図 1)。

5. 調査

調査は上正下譌が列挙する正誤の項ごとに、対象となっている図形部品を含む小篆を試作したツールによって図 7 のように取り出し、復古編が定義する正字形・誤字形を数えることで行う。

たとえば、「歩」を含む小篆は大徐本に 11 項あり、上正下譌の規準を適用すると海源閣本においては步, 跬, 涉(涉), 灑, 陟の 5 項が「歩」の誤りとされる字形を含む。



図 7: 歩の検索結果

上正下譌での「歩」の正誤規準は図 3 を参照されたい。步, 跬, 涉(涉), 灑, 陟は終筆を右側に戻している。

既に述べたように、復古編の正誤規準は必ずしも現存の大徐本の字形を正しいとするものではない。この異なりの理由の解明も一つの課題ではあるが²⁹、本稿では大徐本の字形揺れの判断規準としての活用であるので、まず大徐本と衝突しない項目に絞って議論する。具体的には、対象となる図形部品の単体字字形の修正を求めない、また、図形部品を含む複合字に対して修正を求めるものが半分以下であるものについて調査する。従って、文献[17]で指摘されている「走」のように大徐本字形をほぼすべて改めねばならないものは対象外である。また、上正下譌が示す図形部品を含むものが復古編の本編に見えないもの³⁰、あるいは復古編の本編では守られていないもの³¹は字形差が正しく伝写されているかに疑問があるため除外した。

5.1. 大徐本と整合する上正下譌と揺れの状況

上正下譌が掲出する字形差のうち、復古編内部で整合性が確認でき、大徐本とも整合しているものは、表 1 に示す 40 項である³²。

²⁹ 上正下譌の全項目に対する大徐本の六書との突合せは、稿を改めて報告したい。

³⁰ 大徐本と整合はするが、復古編本編に用例が見えないものとして天(項番 1)、焉(項番 11)、泉(項番 30)、空(項番 47)、鼻(項番 62)、伯(項番 70)、紀(項番 75)、戰(項番 75)の 8 項目がある。

³¹ 大徐本と整合はするが、復古編本編とは整合しないものとして石(項番 33)、非(項番 42)、斗(項番 50)、亼(項番 51)の 4 項目がある。これらは復古編内部で矛盾していることになる。

³² 単体字の字形は整合しているが、半数以上の複合字が整合していないものは、乃(項番 16)と今(項番 20)の 2 つであった。陳昌治本は今の単体字の字形を改めて整合性を取っている。

表 1: 復古編「上正下譌」が示す正誤と、各資料での準拠の状況

- 項番: 上正下譌が示す字形差の組の通番。文献[18]の pp.239-273 と同じ通番である。
- 部品: 字形差を示す部品を指示する UCS 漢字。
- 各資料に対し、当該部品を含む小篆の数(母数)a, そのうち上正下譌の規準で正しいとされる字形である数 b を b/a の形式で示す。a=b(揺れなし)の場合はセルを灰色で塗っている。
 - 宋刊大徐: 海源閣本の状況。
 - 五音韻譜: 南宋刊五音韻譜の状況。
 - 復古影宋: 復古編黃丕烈旧藏影宋本の状況。
 - 復古元刊: 復古編好古齋元刊本の状況。
- 影宋本では字形差が読み取れない場合は元刊本が示す例示字形によって正誤を判定した。

| 項番 | 部品 | 宋刊大徐 | 五音韻譜 | 復古影宋 | 復古元刊 | 備考 |
|----|----|---------|---------|-------|-------|---|
| 4 | 步 | 6/11 | 10/11 | 2/2 | 2/2 | |
| 6 | 章 | 17/17 | 17/17 | 2/2 | 2/2 | 影宋本で判定 |
| 7 | 𠂔 | 114/127 | 124/128 | 11/14 | 14/14 | 海源閣本の𠂔 ³³ を除外 |
| 10 | 鳥 | 143/147 | 146/147 | 10/10 | 10/10 | 元刊本で判定 |
| 14 | 𠂔 | 112/136 | 119/136 | 14/19 | 19/19 | |
| 15 | 未 | 14/15 | 15/15 | 1/1 | 1/1 | |
| 17 | 可 | 48/48 | 48/48 | 3/3 | 2/3 | |
| 18 | 豆 | 65/66 | 65/66 | 11/11 | 11/11 | |
| 19 | 井 | 9/14 | 11/14 | 1/1 | 1/1 | |
| 21 | 高 | 22/22 | 22/22 | 2/2 | 2/2 | |
| 22 | 京 | 25/25 | 25/25 | 5/5 | 5/5 | |
| 25 | 出 | 49/62 | 56/62 | 3/3 | 2/3 | |
| 27 | 舍 | 4/5 | 5/5 | 1/1 | 1/1 | 元刊本で判定 |
| 28 | 𠂔 | 40/40 | 40/40 | 2/2 | 2/2 | |
| 29 | 甬 | 11/13 | 12/13 | 3/3 | 3/3 | |
| 31 | 𠂔 | 6/7 | 6/7 | 2/2 | 2/2 | |
| 32 | 戎 | 3/3 | 3/3 | 1/1 | 1/1 | |
| 34 | 交 | 22/23 | 23/23 | 3/3 | 3/3 | |
| 35 | 老 | 7/8 | 8/8 | 1/1 | 1/1 | |
| 37 | 而 | 61/61 | 61/61 | 9/9 | 9/9 | |
| 38 | 吳 | 6/7 | 5/6 | 2/2 | 2/2 | 海源閣本で誤が重出 ³⁴ |
| 40 | 𠂔 | 54/57 | 57/58 | 8/8 | 6/9 | 上部「丿」で判定 ³⁵ 海源閣本の𠂔 ³⁶ , 影宋本の𠂔 ³⁷ を除外 |
| 41 | 云 | 17/17 | 17/17 | 2/2 | 2/2 | |
| 48 | 董 | 13/19 | 16/19 | 1/1 | 1/1 | |

³³ 海源閣本の𠂔は「𠂔」を「𠂔ヒ又」に作る。

³⁴ 言部の中で重複しており、海源閣本、陸心源旧藏本、平津館本、藤花榭本、陳昌治本に見える。五音韻譜や汲古閣本、小徐本にはこの重出は無い。

³⁵ 影宋本は𠂔を𠂔の違いを問題とするのに対し(この2字の違いは2.2節の説の議論を参照)、元刊本は𠂔を由の小篆から類推して「𠂔へ𠂔」のような字形で書いてしまうものを誤りとしたものと思われる。

³⁶ 海源閣本の𠂔は「𠂔」を「田」に作る。

³⁷ 影宋本の𠂔は「𠂔」を「𠂔」に作る。

| | | | | | | |
|----|---|---------|---------|-------|-------|--------------------------|
| 53 | 五 | 21/21 | 21/21 | 1/1 | 1/1 | |
| 55 | 𠂔 | 109/128 | 106/128 | 16/16 | 16/16 | |
| 57 | 足 | 114/115 | 114/115 | 17/17 | 17/17 | |
| 58 | 𠂔 | 11/12 | 11/12 | 3/3 | 3/3 | |
| 59 | 𠂔 | 50/53 | 49/53 | 6/6 | 6/6 | |
| 63 | 卷 | 7/8 | 8/8 | 3/3 | 3/3 | |
| 64 | 縣 | 2/2 | 2/2 | 1/1 | 1/1 | |
| 66 | 𠂔 | 119/119 | 119/119 | 13/13 | 13/13 | |
| 68 | 方 | 70/78 | 76/78 | 7/7 | 7/7 | |
| 69 | 矛 | 65/65 | 65/65 | 6/6 | 6/6 | |
| 71 | 邑 | 190/190 | 189/189 | 12/14 | 14/14 | 五音韻譜の郵 ³⁸ を除外 |
| 72 | 良 | 19/19 | 19/19 | 1/1 | 1/1 | |
| 74 | 專 | 15/15 | 15/15 | 1/1 | 1/1 | |
| 76 | 豐 | 5/5 | 5/5 | 1/1 | 1/1 | |
| 77 | 主 | 9/9 | 8/9 | 2/2 | 2/2 | |
| 78 | 音 | 12/20 | 18/20 | 2/2 | 2/2 | |

5.2. 大徐本と整合する上正下譌と揺れの状況

表 1 に示した結果について、「正しい形状」の比率の範囲と、その比率の範囲に収まる項目数をヒストグラムで示したものが図 8 である。本来であれば上正下譌を含む復古編は、本編では誤りとしている字形は出現せず、比率 1.0 に全 40 項が集まる筈だが、影宋本・元刊本ともここでは 3 項で揺れが生じている。また、五音韻譜では「正しい形状の比率」が高いものほど項目数が多いという傾向が見えるが、海源閣本はそうになっておらず、揺れの程度が大きいことが判る。

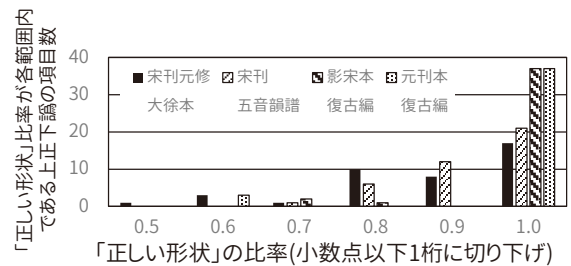


図 8: 上正下譌の各項目に対する揺れの分布

表 1 の「正しい形状」比率のヒストグラムである。

予備調査[15]では復, 眞, 亢, 長, 出などいくつかの字形差の現れ方を海源閣本と宋刊五音韻譜で調査し、海源閣本の揺れが多い結果を報告したが、今回の調査で揺れが見える項目数、また揺れが生じている項目における揺れの数のどちらにおいても、五音韻譜より海源閣本が揺れていることが確認できた。

5. 今後の課題

本稿のために試作した対応関係データでは、「誤」のように説文小篆レベルで重出なのか、小

³⁸ 宋刊五音韻譜の郵は破損が大きく判断できない。

篆では別字であっても「寒」のように現状の UCS 漢字で区別できない小篆なのか³⁹を区別するための情報を欠いている。このため、海源閣本と五音韻譜という一見すると全ての小篆が対応している筈の資料で母数が異なるという場合があり、確認作業の工数が増えている。少なくとも表示に際して何等かの情報を付加できることが望ましいだろう。

また、UCS 漢字は説文小篆を直接強引に楷書化して符号化したものではないため、UCS 漢字を図形部品とした絞り込みは上正下譌が問題とする図形部品を完全に絞り込むことができず、目視で除外する工数がかかる。本稿で扱ったものでは、例えば「方」と「𠄎(𠄎)」の左側は由来も小篆字形も異なる別物であるが、楷書の IDS で検索する限りは、区別は困難である。対象が説文小篆に限定できるのであれば、守岡知彦氏が開発している実体参照を用いた説文小篆 IDS[23]による改善などが考えられる。

謝辞

本研究は科研費課題番号 16K004600A, 19K12716 の成果を含みます。高橋由利子先生、大西克也先生、白石将人先生、董婧宸先生、邱永祺先生、陳信良先生、守岡知彦先生には貴重な資料と有益な議論を頂きました。深く感謝致します。

参考文献

- [1] TCA and China. ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4634, Proposal to encode Small Seal Script in UCS, 2014-09-30
- [2] 曲理查, 鈴木俊哉, 王曉明, 魏林梅. ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4853, Shuowen Seal Ad Hoc Meeting Resolution, 2017-09-01
- [3] CCDP. ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N4855, Comments on Encoding of Small Seal Script Characters, 2017-09-08
- [4] 許慎. 説文解字, 中国書店, ISBN 9787805680392
- [5] 董婧宸. 藤花樹本《説文解字》底本及校刊考, 文献, 2019(06), pp.47-61

³⁹ 「寒」で指示できる小篆には「實也。从心塞省聲。」とされるものと、「過也。从心衍聲。……或从寒省。」とされるもの(愆の或体)があるが、「寒」の小篆は「𠄎」のように描くのに対し、「寒」の小篆は「𠄎」であって、小篆の上では「𠄎」に相当する部分は別物である。前者は「𠄎」で特定できるが、後者を特定可能な楷書は清代には通行しなかった模様である。説文通檢では、「寒」について両者を指示する楷書として扱っており(巻10下, 葉4右に「寒: 五十六又愆重文」とある), 漢字データベースプロジェクトによる段注本データでも両者を「寒」で指示している。

- [6] 王貴元. 《説文解字》版本考述, 古籍整理研究学刊, 1999(06), pp.41-43, p.34
- [7] 鈴木俊哉. 清刊大徐本説文解字の版本評価の再検討に向けて, 環境科学研究, 11 (2016-12-31), pp.77-100
- [8] 董婧宸. 孫星衍平津館仿宋刊本《説文解字》考論, 励耘語言学刊, 2018(01), pp.219-234
- [9] 王寧, 王立軍, 許學仁, 魏林梅, 鈴木俊哉, 陳壯, 王曉明, 胡佳佳. Shuowen Seal Informal Meeting Report, ISO/IEC JTC1/SC2/WG2 N5089, 2019-06-01
- [10] 鈴木俊哉. 『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について, 環境科学研究, 12 (2017-12-31), pp.11-35
- [11] 西原一幸. 字様の研究:唐代楷書字体規範の成立と展開, ISBN 9784585280170
- [12] 池田証壽. 漢字字体史の資料と方法:初唐の宮廷写経と日本の古辞書, 北海道大学文学研究科紀要, 150, pp.201-236
- [13] 邱永祺. 張有《復古編》綜合研究, 臺北市立教育大學碩士論文 (2011), <https://hdl.handle.net/11296/538zcm>
- [14] 鈴木俊哉. 北宋『復古編』の元代の増補2種の文字集合の違いについて, 情処研報(DC), 2021-DC-121 (6), pp.1-6 (2021-07-08)
- [15] 鈴木俊哉. 小篆の部品図形の不統一性から見る字書資料の参照関係, 情処研報(CH), 2021-CH-127 (3), pp.1-5 (2021-08-21)
- [16] 鈴木俊哉, 鈴木敦, 菅谷克行. 『説文解字』小徐本の版本比較における字形差判断基準の調査, FIT2016 講演論文集 第4分冊, RN-002, pp.15-22
- [17] 王珏. 宋代《復古編》“規範”小篆字形“走”对元明清篆書的影響, 文化学刊(06), (2013), pp.159-163
- [18] 王珏. 北宋張有《復古編》研究, 中國社會科學出版社, 2020, ISBN 9787520372626
- [19] 劉冠偉, 李媛, 池田証壽. GlyphWikiによる觀智院本類聚名義抄字形の再現, じんもんこん 2020 論文集, (2020), pp.203-208
- [20] 川幡太一. 小篆フォント SW.ttf⇔UCS 対応表, kanji-database.sourceforge.net/fonts/swfont/index.html
- [21] 台湾中央研究院. 小學堂小篆資料庫. <https://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/xiaozhuan>
- [22] 白須裕之. 漢籍の電子的な翻刻について: 『説文解字注』の Unicode 轉寫を事例として, 東方学報 89, (2014), pp.238-211
- [23] 守岡知彦. 説文小篆に対する漢字構造記述の試み, 東洋学へのコンピュータ利用第33回セミナー, (2021), 講演概要集 pp.17-24, <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/seminars/oricom/PDFs/2021-7PDFs/2morioka.pdf> (2021-07-31 閲覧)